

5章

校内体制づくり

1章から4章において、不登校の未然防止に大切なことや、新たな不登校児童・生徒を生まないためには何が重要かを述べてきました。

まず、不登校の現状と課題を把握した上で、「わかる喜びのある授業」、「居心地のよい学級づくり」、「学校種間連携」が大切であることを確認してきました。

新たな不登校を生まない魅力ある学校づくりに向けて大切なことは、授業づくり・学級づくり・学校種間連携に、それぞれ単独ではなく、総合的に取り組むということです。

この章では、この総合的な取組みである校内体制づくりについて考えていきます。

1 | 校内体制のあり方

すべての児童・生徒が毎日生き生きと学校生活を送れるようにするためには、児童・生徒に寄り添い、一人ひとりを理解することや、教職員全員で日々の教育活動に取り組む必要性を認識することが求められています。

このことは、不登校に限らず、いじめ・暴力行為等様々な問題行動の未然防止にもつながる大切なことです。しかし、現状はどうでしょうか。これらの大切さを認識していても、毎日様々な業務に追われる中、児童・生徒に寄り添う時間が十分に取れなかったり、全校体制でとはいうものの、共通理解が図れず、一部の教員に負担がかかってしまったりするなど、課題があるのではないのでしょうか。総合教育センターの研修講座受講者のアンケートからも同様の課題が見受けられます。

- 生徒とゆっくり話をする時間を持たなければならないと思うのですが、会議が続く、教材研究の時間すら十分取れないでいます。どうしたら・・・？
- 多忙さを理由にしないで、一人ひとりの変化に敏感に丁寧に対応していきたいと思うのですが・・・。
- 正直言って、同じ学年でも先生方の意識がそれぞれで、足並みをそろえた行動ができなければ、不登校対策にならない気がします。中堅としてそのあたりの声かけや意識付けができるよう行動していきたいと思いました。

(平成23年度神奈川県立総合教育センター「人格的資質向上研修講座受講者アンケート」より)

これらの課題を解決するために、また、アンケートにあるような教員の気持ちに添えるためには、どのような校内体制が必要なのでしょう。

ここまで、「わかる喜びのある授業」、「居心地のよい学級づくり」、「学校種間連携」を紹介してきましたが、不登校の未然防止を進めていくには、これら個々の取組みを一つの学校の中で有機的につなげていく校内体制づくりが重要です。

すべての児童・生徒が、楽しく、安心して意欲的に学校生活を送れるように、すべての教員が、信念を持ち、安心して意欲的に日常の教育活動に取り組めるような校内体制が求められています。そのためには、校長の強い思いを持ったリーダーシップの下、教職員の一致協力した全校的な指導体制が不可欠です。

校長のリーダーシップの下、不登校の未然防止につながる取組みを展開している具体的な実践事例を見ていきましょう。



この章の2節で紹介している具体的な実践事例は、次のとおりです。
具体的な取組みについては、主な項目を掲載しています。

【具体的な取組み 1】

○チーム支援を中心とした校内体制

効果的なケース会議
校長のリーダーシップ

E 小学校の取組み

72～73 ページ参照

【具体的な取組み 2】

○教育相談コーディネーターを生かした校内体制

この子に合わせた児童支援・教育相談・地域連携

A 小学校の取組み

74～75 ページ参照

【具体的な取組み 3】

○「減らす・生まない・増やさない」をキーワードにした校内体制

各月対応状況報告
居場所のある学級経営

F 中学校の取組み

76～77 ページ参照

【具体的な取組み 4】

○教育課程の工夫を中心とした校内体制

教育課程上の工夫
教員と生徒へのインタビュー

G 高校の取組み

78～79 ページ参照

3節は、「教育相談事例からみる校内体制」として3事例を紹介します。

【相談事例 1】

担任と信頼関係ができたことで好転したケース（小学校）

【相談事例 2】

リソースルーム（教育支援室等）を活用したケース（中学校）

【相談事例 3】

教師にとって見やすいオーソドックスなケース（高等学校）

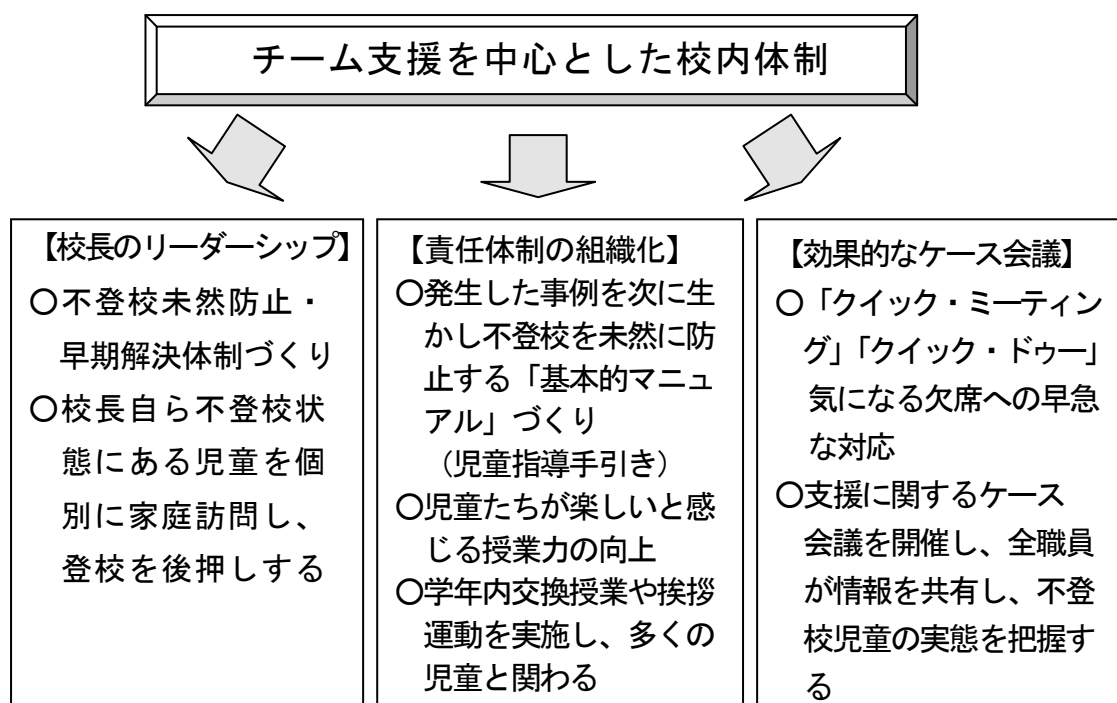
2 具体的な取組み

(1) チーム支援を中心とした校内体制

～厚木市立E小学校の実践～

E小学校（48 ページ参照）は、大規模な小学校です。地域や家庭状況に様々な課題を抱えている学区ですが、校長のリーダーシップの下、登校支援を必要とする児童を全職員でチーム支援するという校内体制が確立されています。

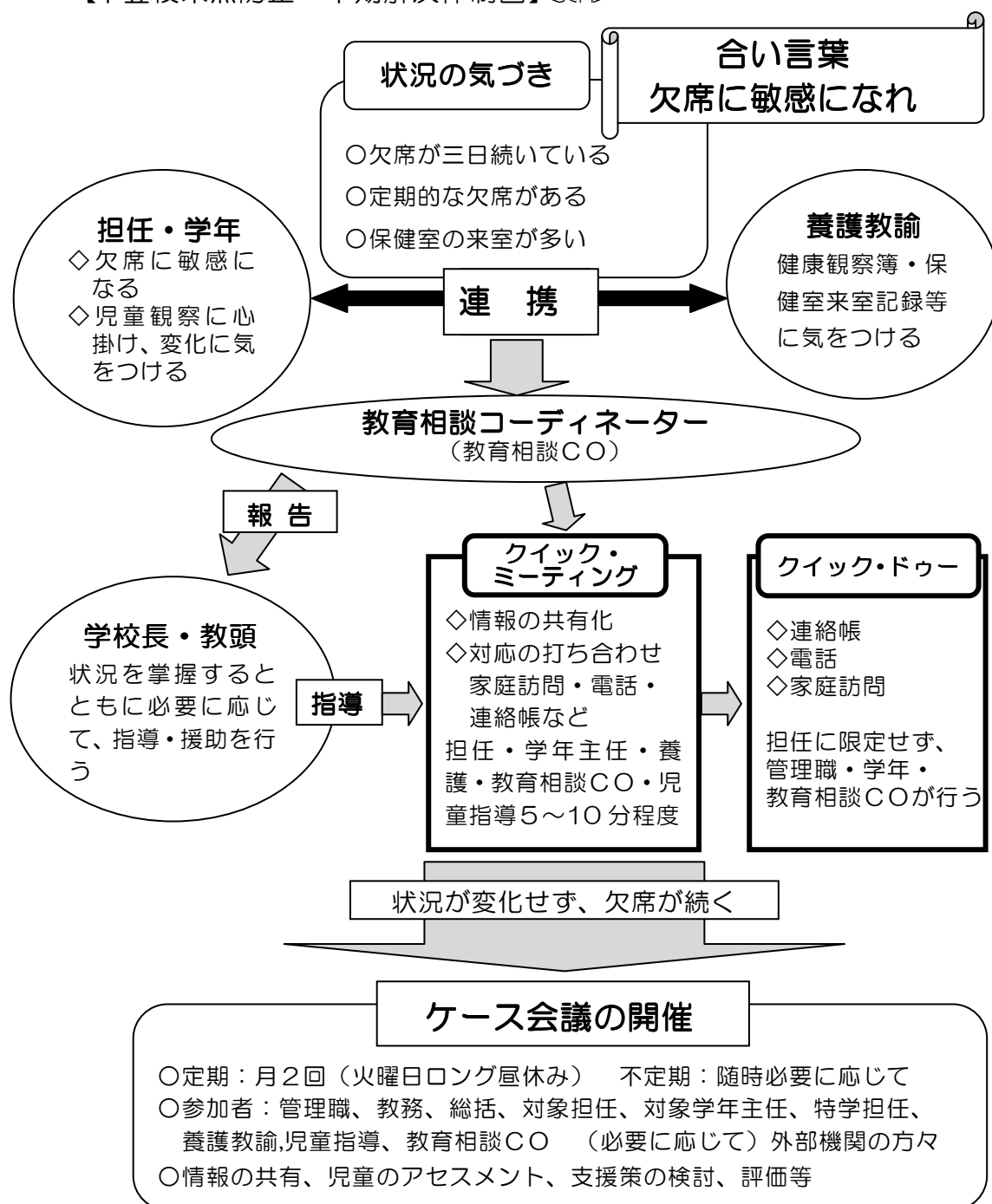
具体的な取組みとして、次の三点を紹介します。



E小学校の校長は、「保護者面談体制」をつくり、校長室をオープンにし、訪ねる保護者を支援しています。着任後3年間で延べ160名になったとのこと。聞き取り調査に伺った時の校長の言葉には、現在の取組みに対する自信と、不登校をなくしていこうという強い思いが感じ取れました。そして最後に校長は、「学校長は、『子どもたちのためになることは何でもやってみよう』という気持ちと行動力が大切です」と語ってくれました。

次ページにE小学校の「不登校未然防止・早期解決体制図」を掲載します。

【不登校未然防止・早期解決体制図】〔資料〕



早期発見・早期対応の取組みを重視するため、「クイック・ミーティング」、「クイック・ドゥー」と名付けて実践に取り組んでいます。こうした校内体制づくりが機能した結果、E小学校では、平成19年度は30人以上不登校児童がいましたが、平成22年度は該当児童がいなくなりました。

〔資料〕 E小学校『児童指導の手引き—平成22年度版「不登校未然防止・早期解決体制」』より

2 具体的な取組み

(2) 教育相談コーディネーターを生かした校内体制

～厚木市立A小学校の実践～

不登校の未然防止を推進するためには、教育相談コーディネーター(以下、コーディネーター)を中心とする校内体制が効果的であることは承知の通りです。コーディネーターについては課題もありますが、東海大学の芳川玲子教授は、コーディネーターに関わる問題とその問題に対する試案を次のように述べています。

コーディネーターの時間的配慮がない、位置付け・役割の不安定さなどが問題である



○不登校の未然防止に重点を置き、コーディネーターの重要性を全職員が認識する
○コーディネーターの複数配置

コーディネーターの重要性が認識され、授業の持ち時間が軽減されている2名のコーディネーターを配置し、不登校ゼロを目指して取り組んでいる学校があります。それは、2章でも紹介した「聴いて 考えて つなぐ学習」に取り組んでいるA小学校です。(24ページ参照)

A小学校では、教職員全員の団結力を大切にするため、チームのあとに学校名をおき「チームA」と名付け、一人の児童を見守る意識を高める環境整備が図られています。A小学校では、コーディネーターを「この子に合わせた児童支援・教育相談・地域連携グループ」のグループリーダーに位置付け、その役割を次のように示しています。また、2人のコーディネーターの持ち時間と役割分担も紹介します。

- 教職員全体に理解・周知を図り、全員で一人の児童を見守る意識化と体制づくり
- 担任は支援プランを立て、支援の道筋を説明することができるようにアドバイス
- 学級担任の気付きを大切に見守ること
- 学級担任一人で抱え込まない環境づくり ※職員室は「語らいの場」である
- グループ内の連携を図り、活動状況を把握しておくこと

【L教諭】5時間

- 巡回相談との連絡調整
- こころの教室相談員との連絡調整
- 幼小連携
- 「支援教育だより」の発行

【M教諭】7時間

- 授業参観を通しての児童の見取り
- 個別支援・保護者との相談
- ケース会議の諸準備・連絡調整
- スクールカウンセラーとの連絡調整
- 「相談室だより」の編集

このように位置付けられたコーディネーターを中心に、どのような校内体制の工夫があるのか、具体的な取組みを見ていきましょう。

【「この子に合わせた児童支援・教育相談・地域連携グループ」の方針と活動】

- 自己肯定感を育む支援教育の充実や困り感をもつ子への幅広い対応
 - ・「困った子」から「困っている子」への見取りを重視
 - ・肯定的な言葉掛けの実践
 - ・スクールカウンセラー、こころの教室相談員との連携
 - ・「支援教育だより」の発行
- 個のニーズに応じた支援体制
 - ・「いつでも誰でも」困っている子への支援を全教職員で共通理解
 - ・「支援可能時間割表」を作成し、「さわやかルーム・こころの教室」を拠点として学習支援に当たる

コーディネーターの役割の一つに、学級担任一人で抱え込まない環境づくりがあり、放課後に各学級担任からの相談に応じています。「困っている子」を抱える学級担任が、コーディネーターに相談しアドバイスを受けた時のことを次のように振り返っています。

- 最初に相談したときに、悩みを「うん、うん」と頷きながら聴いてくれたことが私にとって大変ありがたかった
- 「こうしなきゃ」と決めつけしないで、一緒に悩んで考えてくれた
- 継続していつも見守っていてくれる、いつも支えていただいているという安心感
- 絶対に改善できると思った
- がんばれる、元気になれる
- 「困っている子」の見取りが的確であった
- 教師として学ぶことが数多くあった

このように、コーディネーターからのアドバイスやフォローが、学級担任にとっては大きな支えとなり、結果として「困っている子」への個のニーズに応じたチームとしての支援体制を成立させ、児童にとっては「授業の中に居場所がある」ことが常態になるのです。

児童・生徒にとっては「居心地のよい学級づくり」が大切なように、教員にとっても「何でも言える、風通しのよい職場、普段からの職場の雰囲気づくり」が大切と、A小学校の校長先生は強調しています。

2 具体的な取組み

(3) 「減らす・生まない・増やさない」をキーワードにした校内体制

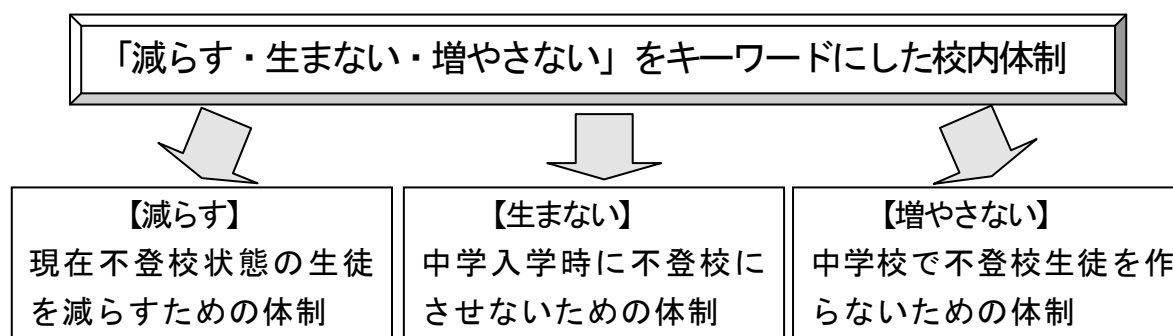
～厚木市立F中学校の実践～

4章の小中連携で紹介したF中学校（58ページ参照）は、教育方針や学校経営方針の下に設定した8項目の「指導の重点」の一つに、不登校対策を掲げています。

3 不登校対策を推進し、学校への不適応を減らし、「中1ギャップ問題」の解消に努める。

（F中学校の平成23年度要覧）

F中学校は、平成20年度から「減らす・生まない・増やさない」をキーワードとして、不登校の状態にある生徒の教室への復帰を支援するとともに未然防止に努めてきました。校長のリーダーシップの下、教育相談コーディネーターと生徒指導担当を中心に組織的な対応を展開しているF中学校の校内体制の実践を見ていきましょう。



【「減らす」ための体制】

この取組みは全職員による課題意識の共有化と生徒への支援の協働化です。

各月対応
状況報告

- 長期欠席及び不登校生徒の状況を学級担任が職員会議で報告（口頭でなく記録したもの）し、情報を共有する
- 対応に漏れや落ちはないかを相互チェックしつつ今後の対応につなげる

支援
シート
の活用

- 学級担任一人では気付かない生徒の様子が、教科担任・部活動顧問・各種委員会を指導する教員の観察によって「気づきのシート」に記入され明らかになる。その情報を基に個別の支援シートが作成され、要支援の生徒にどう関わるかを全職員が確認することができるものとなっている

サポート
ルームの
設置

- サポートルームに登校する生徒には個別の時間割があり、空き時間を活用し、学年を超えた職員体制で担当する
- 担当する教員は、連絡ノートで当該生徒の状況の連絡を密にする。そして、その内容は職員会議で報告される

【「生まない」ための体制】

この取組みの柱は、「連続した欠席への感性」と「小中連携の深化」ですが、「小中連携の深化」については、4章でも紹介しましたので、参照して下さい。

連続した欠席への感性	<ul style="list-style-type: none"> ○連続2・3日といった休み始めの対応を重視する →スピード感ある対応、欠席に敏感になる、感性を磨く ○2日欠席は電話、3日連続欠席は家庭訪問の徹底 ○教育相談コーディネーター中心の細やかな指示
小中連携の深化	<ul style="list-style-type: none"> ○Q-Uの結果を加味した引き継ぎ→配慮面の細かな引き継ぎ ○小学校での授業（実施・参観）→顔を知っている職員をつくり安心した入学へつなげる ○小中児童生徒指導情報交換会→きめ細かい受け入れ準備

【「増やさない」ための体制】

この取組みは、Q-U、Y-P アセスメントの実施と結果分析による「一人ひとりの居場所づくり」のための学級経営の充実と教育相談コーディネーターを中心とした「教員間支援・連携」の仕組みです。

一人ひとりの居場所のある学級経営	<ul style="list-style-type: none"> ○Q-U、Y-Pアセスメントを全生徒が実施し、生徒の客観的理解に努め、個別教育相談、学級経営の軌道修正に生かしていく
教員間での支援連携体制	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒指導担当や教育相談コーディネーターから学年主任に担任のフォローなどを依頼しながら、持続できる対応を全体でとれるよう配慮する

「減らす・生まない・増やさない」をキーワードに、「思いの共有・意識の共有・基準の共有・行動の共有」を大切に小学校との連携も含め、組織的な対応に取り組んできた結果、不登校が激減したF中学校。平成23年度はサポートルームを利用していた生徒も学級に戻ることができ、現在は利用者がゼロの状況です。校長が研修講座の講演の中で、「学校選択制がとられているこの市では、平成23年度は一番人気の学校です」と話したことが印象的でした。

この章で紹介した3校は、いずれも校長が強い思いを持ってリーダーシップを発揮し、それに応える教員のフォロワーシップがマッチした実践例です。この章の冒頭で紹介した教員の悩み・課題が、これらの実践例を参考とし、解決につながることを願います。

校長の意識が変われば、教員が変わる、児童・生徒も変わる

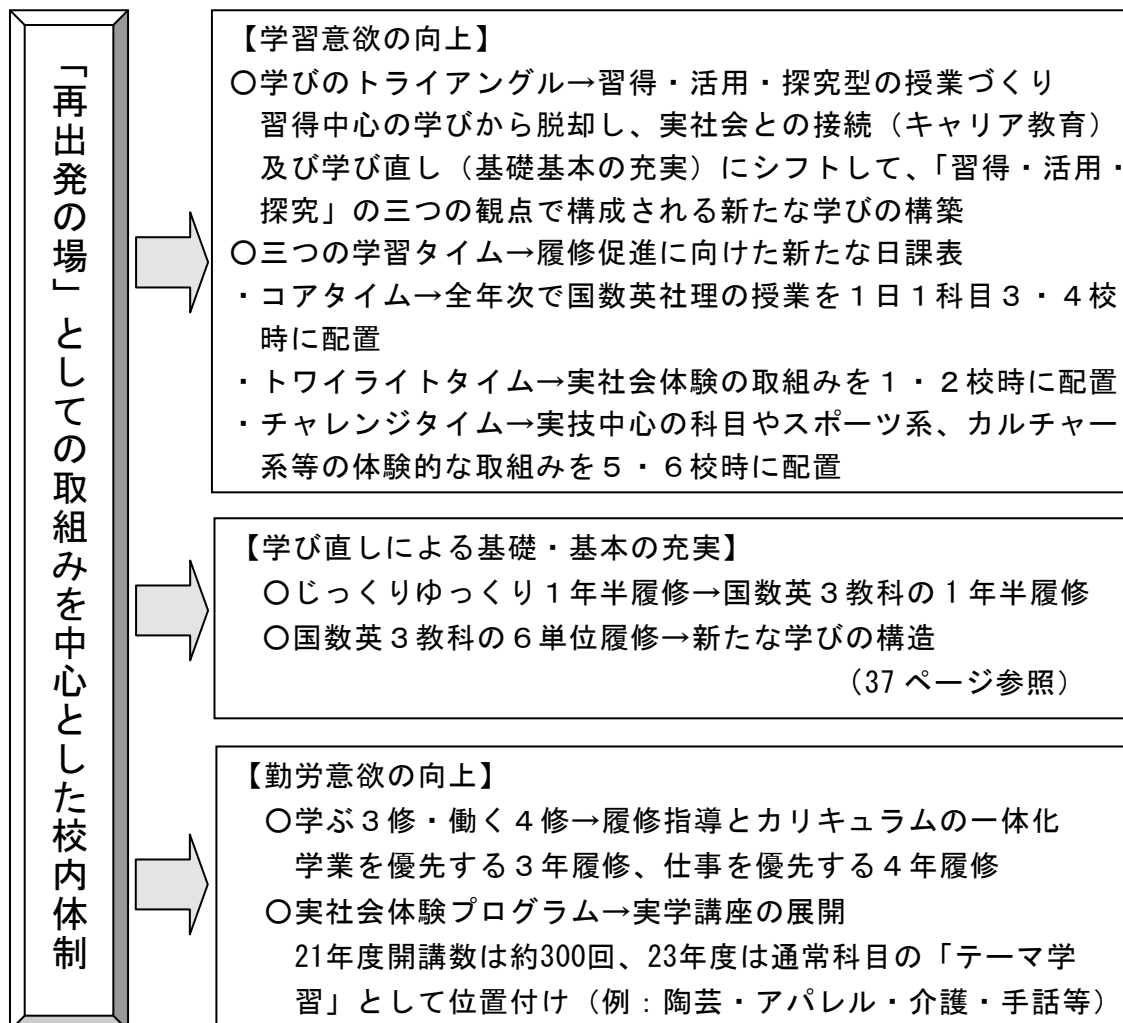
2 具体的な取組み

(4) 教育課程の工夫を中心とした校内体制

～ G 高校の実践～

G高校（36 ページ参照）には、中学校時代に人間関係や学習面でつまずいた経験のある生徒や、家庭的・経済的事由で十分な学習環境に置かれていない生徒など、様々なタイプの生徒が在籍しています。このような生徒に対して学校は、自己有用感を高め、充実した楽しい高校生活が送れるように、教育課程上の工夫やきめ細かい生徒理解に努めています。

「学び直し」を含めた「再出発の場」として、G高校が取り組んでいる教育課程の工夫を紹介します。



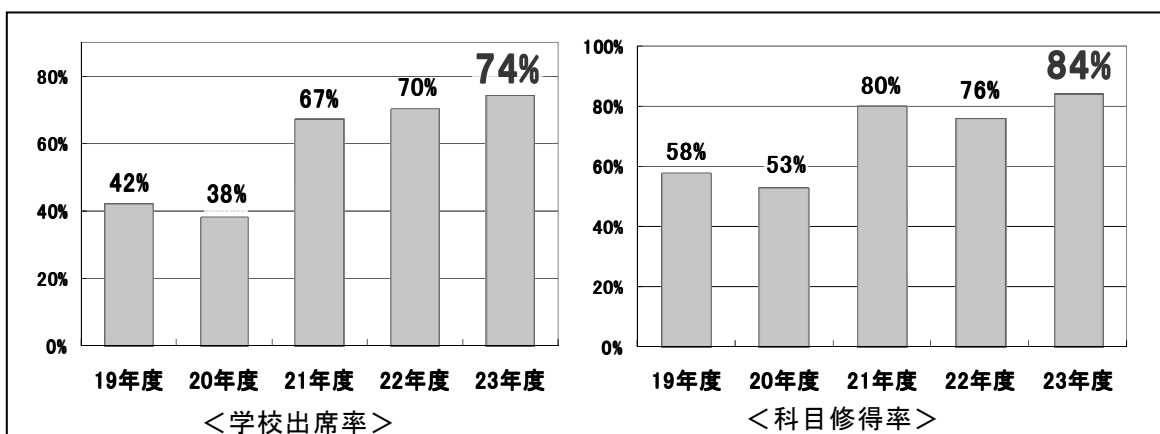
G高校の教師と、小中学校時代に不登校経験を持ち、現在は毎日登校できている生徒へのインタビューを行いました。その内容から、学校側・教員の工夫が、生徒にとって「学び直しを含めた再出発の場」として、居心地のよさにつながっていることが確認できます。

【教師へのインタビュー：不登校の未然防止や減少のために取り組んだことで、短期間で成果があった事例を教えてください。】

- 毎月の出席状況を家庭に報告している。携帯電話のHPに本日の授業や行事を知らせています。
- 中学校の時に「学校においで」と声を掛けてもらえなかった生徒が多く、「講座が面白いからおいで」と声を掛けてあげると喜び、講座に参加できます。授業が楽しいということで、一瞬にして登校できるようになるケースもあります。
- 「不登校の未然防止」は結果です。カリキュラム開発が結果的に不登校の減少につながっているのです。退学者は数年前、50人のところ、昨年は、2人でした。

【生徒へのインタビュー：先生にしてもらって嬉しかったことを教えてください。】

- 受験で悩んでいる大変なときも、卒業後の大切さを教えてくださいました。
- 友達のように、気さくに話しかけてくれる先生が、いつも声を掛けてくれます。廊下でもどこでも、気楽に話せるからいいと思います。
- 自分の話を受け流さず一生懸命聴いてくれたことです。



第16図 G高等学校定時制課程における学校出席率と科目修得率

「学習意欲の向上」、「学び直しによる基礎基本の充実」、「勤労意欲の向上」に取り組んできた学校の努力により、上図のように学校出席率も科目修得率も高くなっています。中学校で不登校だった生徒や不登校を経験した生徒を積極的に受け入れている定時制ならではの工夫ですが、他の課程にも学ぶことは大きい実践だと考えます。

3 教育相談事例からみる校内体制

総合教育センター亀井野庁舎は、教育相談センターとして多様な専門職（指導主事、臨床心理士、言語聴覚士、作業療法士、社会福祉士、精神保健福祉士、医師等）を活用した教育相談事業を行っています。

「不登校対策プロジェクトチーム」の教育相談グループは、教育相談センターにおける教育相談実践から不登校の対応策と予防策について研究を行ってきました。

平成 23 年度は、不登校・不登校傾向を主訴とする約 150 ケース（平成 22 年度 10 月から平成 23 年度 8 月末まで）の中から、不登校の状況が改善又は改善方向に向かっている事例のケーススタディを行いました。そして、学校が不登校対策を講じていく上で参考になる具体的な対応を抽出し、その考察を行いました。

その中から、不登校児童・生徒が、学校や教員の対応の変化・工夫により学級復帰ができた 3 事例を紹介します。

【相談事例 1】～学校の対応の変化で好転したケース～

小学校 6 年 女子（以下 C さん） 通常の学級在籍

小学校 3 年の給食時間中にクラスメイトとトラブルになり、それがきっかけで不登校となりました。学校は、C さんの約束事を守らない態度や、気が強く人を傷つける言動は、C さんのわがままに原因があると考えていました。

当初学校は、C さんのわがままや人を傷つけるような言動に対する指導に重点を置いていましたが、教育相談センターや教育支援センターのスーパーバイザーとの連携等により、C さんへの見方を変え、他の児童との比較ではなく、彼女の中での比較（成長）を重視するようになりました。

指導経過の中で、家庭環境の問題等も懸案事項として指摘されましたが、C さんのプライドの高さや、学習が遅れていることに対する苦しさ、コミュニケーションスキルの低さ、情緒面の課題等について理解を深めながら、学級担任や養護教諭が中心となって柔軟に彼女に寄り添っていきました。また、不安を感じている母親には、その場の対応だけではなく、見通しを持って C さんに向き合おうと考えていることを伝え、安心感を持たせようと努めています。

子どもを取り巻く環境要因はたくさんあります。しかしその中で、学校の対応の変化により、少しずつ子どもに変化が見られるようになった事例と捉えることができます。

【相談事例2】～リソースルーム（個別に学習支援を行うための別室）を活用したケース～

中学校2年 男子（以下Dさん）通常の学級在籍
アスペルガー障害の診断あり

入学後、クラスの男子からからかわれることがありました。その後、からかいはなくなりましたが、被害者意識が高まり、夏休み明けから、Dさんは登校前のトイレから出られなくなりました。

小学校6年時、Dさんはいじめに遭い、学校では泣いていることが多く見受けられました。中学校1年9月、学校は教育相談センターの来所相談につなげ、Dさんのストレスの軽減を図るとともに、保護者を含めた三者でDさんの特性について共通理解を図りました。その後学校は教育支援センターを紹介しましたが、利用にはつながりませんでした。

中学2年の4月、学校は別室において個別に学習を支援するリソースルームを生徒のニーズに合わせて2部屋に増設し、担当職員も2人配置する等、不登校生徒の受け入れ態勢を整えました。また、クラス編成にも配慮しDさんを比較的穏やかなクラスに在籍させました。以後、Dさんのリソースルームの利用は定着し、登校できるようになりました。学校は教科の学習だけでなく、スクールカウンセラーによるソーシャルスキルトレーニングも取り入れられました。夏休み明けからは、教頭や担任以外の学年の教員が学習の支援に出向く等、リソースルームに関わる教員が増えてきました。ほかのリソースルーム利用者とともに、特別支援学級の体育の授業やお楽しみ会等に参加するようになり、Dさんはクラスの遠足にも参加することができたのです。

不登校生徒の対応を考えると、リソースルームには大きな効果が期待できます。しかし、担当者を常駐させるためには教員の負担が過重にならないような配慮も求められます。また、安心・安全な場としての居心地のよさばかり考えると、逆に教室復帰が難しくなることも考えられます。

リソースルーム的な機能は、本来は学級に備わっていなければならないものです。最近「いじる、いじられる」という言葉をよく聞きます。人をからかわないことは学級の大前提ですが、万一配慮に欠ける言動がみられても、それに対して叱るのではなく、温かく受け入れつつ注意し合える雰囲気が必要なのです。

【相談事例3】～支援チームが効果的に動いたケース～

高等学校3年 女子（以下Fさん）

高校1年時の欠席は少ないが、後半は友達関係がうまく構築できず登校を渋るようになり、毎日母親が送迎していました。2年に進級後は、周囲の女子の化粧やおしゃれに付き合うのが嫌で欠席が増えました。一緒にいる友達はいない状況でした。

3年生に進級後、Fさんは教室に入ることができるようになりましたが、それでも保健室の利用は続いていました。夏休み前、Fさんがクラスの球技大会に出ると、クラスメイトの数人がFさんに声を掛けています。また、毎日うるさくて嫌だと感じていた男子と協力して競技に臨み、勝つことができました。行事を通してFさんは「一人ひとりはいいい人たちだ」と感じています。

夏休み明けからは、Fさんの保健室利用はなくなり、教室で毎日を過ごすようになったのです。

この事例は、学校が当該生徒への理解を深めながら、柔軟に対応したケースです。教育相談コーディネーター・学級担任・養護教諭を中心にチームとしての対応はサポートタイプであり、Fさんや保護者が信頼を寄せています。また、学習や進級などに対して不安を抱えるFさんを教科担任が個別に指導する、本人が登校をきつと感じている時には校門に迎えに出る等、チームとしての機敏な動きが見られますが、それは何度となくタイムリーにコア会議（支援チームの一部メンバーで行う少人数会議）が開かれていることに支えられています。

2・3年生と持ち上がった学級担任の人と人のつながりを大切にする学級経営も効果的です。Fさんの誕生日に「おめでとう」と言いに来てくれたり、行事に参加した時に声をかけてくれたりするクラスメイトがいます。そこには学級の全員が受け入れられている雰囲気があり、一人ひとりが安心して過ごすことができる環境が整えられていることがうかがえます。Fさんは担任のことを、「厳しいけど、優しい先生」と話していますが、担任の支援の考え方や具体的な行動が学級の他の生徒の中にも位置付いたのではないかと思います。

このケースの生徒は、言葉による表現が下手で友達づくりが難しいですが、担任の効果的な学級経営により、コミュニケーションスキルを向上させていることがうかがえます。

Fさんはその後の相談で「友だちできた。本当の友達。安心していられる人」「教室に居場所ができた」と相談員に報告しています。Fさんは機械関係の会社への就職が決まりました。

ここで取り上げた3事例は、児童・生徒が不登校傾向であった状態から改善に向かったケースです。その共通する背景として、学校が児童・生徒を取り巻く人的または物的な環境を改善したことがあります。

児童・生徒の状況が個々によって異なるとしても、各学校が実情に合わせて、児童・生徒が過ごしやすい環境を整えることで、不登校の状態が改善されます。このような取組みを意識的に行うことが、不登校の未然防止につながるのです。

学校がすべての教育活動を通して児童・生徒理解を深め、児童・生徒のそれぞれの状況に応じた授業づくり・学級づくりを組織的に行っていくことは、不登校の未然防止のみならず、さまざまな児童・生徒指導上の課題解決につながっていくと確信します。

参 考

参考に教育相談センター（神奈川県立総合教育センター亀井野庁舎）の紹介をします。

【来所による相談】（要予約）問い合わせ先 0466-81-8521

○月～金曜日、第二土曜日 8:30～17:15

（祝休日、12月29日～1月3日を除く）

○土曜不登校相談 10、3月を除く第四土曜日 8:30～17:15

【電話による相談】

○総合教育相談・不登校ほっとライン 0466-81-0185

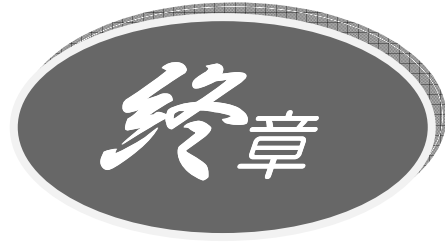
○発達教育相談 0466-84-2210

《不登校ほっとライン》

不登校に関する子どもの悩み、日常の過ごし方、保護者の関わり方の相談、進路に関する情報提供等について電話相談窓口を設けている

《土曜不登校相談》

不登校に関する本人、保護者を対象に来所相談を行っている



教員一人ひとりの心構え

小学校・中学校時代に不登校経験がある生徒で、現在元気に高等学校に通っている生徒から、不登校になったきっかけなどについて話を聞く機会が何度かありました。生徒からの一方的な話ですが、その当時のことを語ってくれた生徒の気持ちを教員はどう捉えたらいいのでしょうか。考えてみて下さい。

聞いて下さい！不登校経験を持つ生徒の声を！

- クラスの中で「言葉の暴力」を受け、担任の先生に相談しようと思
い話をしたところ、「あなたが直せるところをまず直しなさい。」と
言われた。それっきり学校に足が向かなくなりました・・・。(小6)
- 学習面、進路のことで悩みがあって、先生に相談しようと思
いをかけたところ、「今忙しいから、後で聴くから」と言われたので待
っていました。でも数日経っても先生は私に声を掛けてくれません
でした。忘れていたのですね。先生に対して、信用をなくしたのは
それがきっかけでした。(中2)
- 私のクラスは、いつもうるさく授業が成立しない場面がありました。
先生は怒鳴り散らしているだけ、静かにしている私たちまで怒られ
て。こんな落ち着かないクラスに居たくないと思いました。(小5)
- 理由はわからないのですが、部活のみんなから避けられ一人になっ
てしまったことがあります。そこで、顧問に話したところ、「暴力を
振るわれたり物を隠されたりとかなら別だけど、よくあることだ、
我慢しろ」と言われました。部活は続けたかったのですが、毎日が
苦しくなり、学校に行くのもつらくなりました。(中1)

※ () 内は不登校になり始めた学年

ある生徒は、不登校になり始めた時のことを振り返り次のように話してい
ました。

先生方が忙しいのはわかっています。そんな中でも自分のために話を聞いて
くれる時間を少しでも持ってくれたら、いじめがすぐにおさまらなくても先生
が自分のために動いてくれていることがわかれば、自分も頑張れたと思う。

毎日の忙しさの中で救いを求めている生徒のために時間を取る、困ってい
る児童のために動く、すぐに解決できなくてもまずは受け止めてあげる、そ
れ以上に大事な会議や業務があるのでしょうか。忙しさの中でも、児童・生
徒に寄り添う姿勢を忘れないことが教員には求められます。

魅力ある学校をめざして

不登校を児童・生徒本人や家庭の問題とのみ捉えたり、児童・生徒が明らかに不登校の状態になってからの対応に重点が置かれたりしたままでは、神奈川県「不登校対策」は前進しません。

「不登校対策」には、教員個々の努力だけではなく、学校としての組織的な取組みと、校長のリーダーシップの発揮が特に重要です。学校全体の取組みの中で、「授業」がわかりやすく充実感を伴うものであること、その基盤となる「学級」が安心・安全な居場所であること、そして、児童・生徒一人ひとりの丁寧な対応が求められているのです。

ここまで各章で紹介した取組みは、いずれも校長の明確なリーダーシップの下、学校が校内体制をしっかりと構築し成果をあげた、モデルとなるべき事例です。そしてこうした取組みは、不登校の未然防止にとどまらず、あらゆる教育活動の発展や活性化に通じるものです。

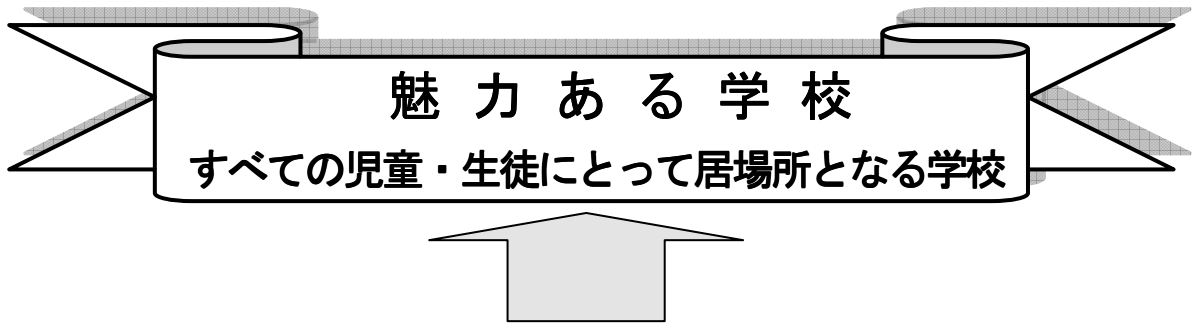
児童・生徒の状況、地域の特徴等を生かした「魅力ある学校」を目指し、全ての児童・生徒が楽しく学校に通い、生きる力を育みながらたくましく成長していくことができるよう、全校体制で取り組むことが期待されています。

各校の実践事例に関しては、紙面の関係等で十分な説明ができませんでしたが、是非各学校で参考にさせていただくことを願います。

最後に、本研究のスーパーバイザーでもある、文部科学省初等中等教育局の三好仁司視学官からいただいた教員へのメッセージを紹介します。

不登校が続く児童・生徒には、個別の対応が求められる。また、不登校の未然防止につながる「魅力ある学校」の在り方も、学校や地域により様々である。どちらも、ただ一つの正解があるわけではなく、多くの要素を考慮しながらよりよい方法を求め続けることになる。しかも、子どもたちは目の前にいる。与えられた条件の中で考え得る最良の方法を、今、選択しなければならない。高い専門性が求められる難しい仕事だが、それが教師の仕事である。だからこそ、ゼロからのスタートで試行錯誤するのではなく、校内の教師同士で学び合い、また、事例を通じて他校の成功や反省に学ぶことが大切になる。

本ガイドブックに整理された考え方や事例の一つひとつが、神奈川県先生方の日々の御努力から生まれた英知の結晶である。全国の教育関係者に積極的に紹介させていただきたい。



【わかる喜びのある授業】

- 一人ひとりのよさや違いをいかした授業
- 一人ひとりに寄り添う授業
- 「ユニバーサルデザイン」を取り入れた授業
- 「学び直し」のある授業
- 「わかった」「できた」と実感させる授業
- 伝え合い、教え合い、学び合いを取り入れた授業

【居心地のよい学級づくり】

- 自分の授業を見直す
- 児童・生徒の日常の様子把握
- 自分の居場所がある学級
- 安心して過ごせる学級
- あたたかい雰囲気と規律ある雰囲気のバランスが大事
- 学校生活のあらゆる場面を生かして、活躍できる場をつくる
- 人間関係づくりの継続

学校ができる 教員ができる 不登校の未然防止

【小中連携・中高連携の推進】

- 校種の違いによる壁を取り除くためにお互いの学校の取組を理解する
- 学習指導方法や学習形態をつなぐ
- 小中連携シートの活用
～行政・専門家との連携～
- 中高連携のあり方
～連携シートの活用～

【校内体制づくり】

- チーム支援を中心とした校内体制づくり
- 教育相談コーディネーターを生かした校内体制づくり
- 「減らす・生まない・増やさない」をキーワードにした校内体制づくり
- 教育課程の工夫を中心とした校内体制づくり

【資料編】

1 不登校の特徴

2 総合教育センターの取組み

1章では、不登校児童・生徒数や原因・きっかけなど現状を見てきましたが、効果的な不登校対策に取り組むためには、不登校の特徴を理解することも必要です。

それぞれの学校・教師一人ひとりが、次のような特徴を認識しておくことが、不登校の早期発見・早期対応につながるのではないのでしょうか。

本資料編の「1 不登校の特徴」では、今日の不登校の特徴と分類について、神奈川県の不登校の現状に詳しく、総合教育センターのスーパーバイザーである芳川先生に校種別特徴と分類別特徴をまとめていただきました。



1 | 不登校の特徴～東海大学芳川玲子教授～

(1) 不登校の校種別特徴

まず、校種別特徴です。それぞれご自分の校種別特徴を理解するだけでなく、他校種の特徴を知ることは、学校種間連携にも役立つでしょう。

<小学校>

心身両面において、個の成長が未成熟な小学校期。それはつまり、「まだ自分の気持ちや身体をコントロールする力が十分ではない」、「その分、環境の影響を非常に受けやすい」ということを意味する。ここでいう環境とは、家庭環境、学校環境と地域環境のことである。なお、家庭環境とは、親子関係、兄弟との葛藤などを指し、学校環境とは学級風土、教師との関係、友人関係、地域環境とは、居住環境、地域性などのことである。

未成熟な子どもは自分の体の調子や気分気付きに気付くため、体調や気分のままに喜怒哀楽を表現する。その気分は往々にして、環境刺激に影響されやすい。即ち、子どもの体調や気分は環境と互いに影響し合うのである。

以上の観点から、小学校の不登校は、個人の性格に、家庭環境と学校環境が強く影響を及ぼして形成されると言える。

小学校の不登校の特徴は、以下のア～キのように整理することができる。

- ア 保護者から離れられない
- イ 遅刻、早退が多い
- ウ 教室に入りたがらない（常時もしくは苦手な教科の授業時）
- エ 身体的不調を訴える
- オ 教師との関係があまり良くない
- カ 友人関係が良くない（もしくは友人が少ない、いない）
- キ 自尊感情、自己評価が低い

<中学校>

環境の影響について、ある程度防御できるように成長したものの、思春期という生理的な側面が加わる時期。即ち、中学校の不登校は、幼少時から形成された本人の性格に、学習や友人関係などの学校環境と地域環境がきっかけで発生する。中学校の不登校の特徴は、以下のア～キのように整理することができる。

- ア 遅刻、早退が多い
- イ 身体的な不調を訴える
- ウ 友人関係のトラブルもしくは孤立していることが多い
- エ 学習に関する苦手意識がある
- オ 部活動などの学校活動に挫折した経験がある
- カ 保護者との関係が不安定
- キ 自尊感情、自己効力感が低い

<高等学校>

個の成長が進み、環境よりも本人の考えや感受性がより重要な要素となる。従って、進学後の高等学校への適応感、友人関係が不登校に影響を与える。高等学校の不登校の特徴は、以下のア～キのように整理することができる。

- ア 学校風土になじめない
- イ 友人関係が希薄、もしくはいない
- ウ 学級の雰囲気になじめない
- エ 遅刻、早退が多い
- オ 学習に興味・関心が薄い
- カ 自尊感情、自己効力感が低い
- キ すべてに関して目的意識が持てない

<特別支援学校>

特別支援学校の児童・生徒は、心身等の障害による困難さにより、対人関係や環境等の変化の影響を受けやすい。そのため、小学校から高等学校までの各段階で見られる学力や社会性などの様々な発達課題に対して、より困難さが生じやすいと考えられる。

特別支援学校の不登校の要因として考えられるものは、障害に起因するもの、障害に関連して二次的に派生するもの、周囲の人々との関わり、小学校や中学校での不登校の経験など様々なものがある。

そこで、特別支援学校の不登校を理解するには、各学校段階を視野に入れた総合的な視点と特別支援教育の専門性の視点が重要になる。



(2) 不登校の分類別特徴

続いて分類別特徴です。

不登校について、今まですでに医学的な見地、教育相談的な見地、不登校のきっかけ等様々な見地からの分類がありますが、ここでは、教師が子どもの不登校をアセスメントする際のわかりやすさを考慮して、今までの分類を参考にしながら、「不登校につながる主要因」の視点から新たな分類を紹介します。

ア. 典型的な不登校

心理的、社会的な理由による不登校。個人－家庭－学校が相互に関係するので、どれを調整しても不登校の改善や未然防止に繋がるが、ここではあえて、より強く影響を与える要因別に紹介します。

<個人的な要因が強い不登校>

①過度の不安・緊張によるもの

過度の不安感や緊張感があるため、社会生活を過ごすことができず、その結果、学校生活においても支障が生じ、不登校になる。分離不安が一つの形である。なお、分離不安になるきっかけは、家庭の不安定さから来るものと学級への不安感からくるものの2種類がある。対処として、不安の源をまず把握することが大切である。

②過剰適応によるもの

不安が背景にあるもう一つの形態の不登校。子どもが環境や家庭の期待に完全に添うようにしようと、自分の内的な欲求や満足を無理に抑え、外的な要求に応じた結果、息切れした状態で休みに入る。いわゆる「充電期間」が必要な不登校。また、性格的に几帳面でまじめである人が多いため、不登校初期は情緒的に不安定になりやすく、一時的に保護者に対して暴力をふるうこともある。

③自我の未熟によるもの

「自分」が年齢相応に成長していないため、ストレス耐性が低く、思い通りにいかないことがあると、精神的に落ち込み、登校意欲をなくす。登校刺激がないといつまでも家庭内にとどまるが、自分の挫折に直面しなくても済むような、楽しい学校行事に参加することもある。また、元来、人との関わりを好む傾向があるので、パソコンのチャットやゲームに興じ、徐々に生活が崩れ、昼夜逆転の生活を過ごす場合もある。

＜家庭的な要因が強い不登校＞

①保護者による虐待

保護者が子どもの衣食住に関する役割を果たさず、もしくは無関心（ネグレクト）であった結果、子どもに基本的な生活習慣が身に付かず、すべてにおいて意欲が低下し、不登校に至る場合、無気力、無感動、無関心が特徴であり、登校刺激に対してもあまり反応がよくなく、人との情緒的なつながりができるまで時間がかかる。

②保護者のメンタルヘルスによるもの

精神疾患やうつ病など保護者のメンタルヘルスの問題が子どもの幼少期から続いている場合、子どもは情緒面において安定した発達を遂げることが難しい。往々にして、子どものほうも病気がちで、学校や学級では、エネルギーを出しにくい状態であることが多い。学級担任が意識的にかかわらなければ、学級からいなくなってしまう不登校である。

③経済的貧困によるもの

経済面で不安定さがある家庭では、保護者は生活を維持することで精一杯。子どもの日々の様子に気付き、こまめに声を掛けることが出来にくい場合がある。そのため、子どもは自分の甘えたい気持ちを友人に求めがち。また、学習習慣が幼少期より形成されていない可能性も高いため、学校の学習についていけず、脱落してしまう。その結果、不登校になったり、非行に走ったりすることもある。



＜学校的な要因が強い不登校＞

①学校・学級風土不適應

「転校・転居」、「中1ギャップ」、「小1プロブレム」などはすべて学校文化もしくは学級風土になじめなかった結果による不登校を意味する。特定のきっかけがない場合もあるので、理解されにくく、わがままだと言われることも多い。ただ、場の雰囲気への感じ方は個人差が大きいので、一概にして捉えずに、学校文化や学級の雰囲気へ一日も早く馴染めるよう、工夫することが早期解決に繋がる。

②学習に関わる問題

学業不振、学習への苦手さから学級に居られず、ドロップアウトした子どもたち。学業不振に至った経緯は家庭的な要因と絡めることが多いが、学習態度には個人差があり、また知的能力と関係することもあるので、教科教授法の工夫もしくは改善から不登校を防ぐことが大切である。また、学校が学習という価値観のみを強く出し過ぎずに、多様な価値観を子どもたちに示すことが、この種の不登校の発生を防ぐ。

③人間関係に関わる問題

友人関係、教師との関係、部活動内の人間関係を称しての表現。学童期や思春期は、友人関係が大きな意味を持つ時期である。それだけ友人関係の挫折は大きな心の傷として残り、登校にまで影響を及ぼすこともある。また、教室のリーダーである教師との関係も登校意欲や学習意欲に影響を及ぼす。教師であると同時に「大人のモデル」でもある教師は、自分の人生観、生き方を伝えられるコミュニケーション能力、課題に遭遇した時に、どう乗り越えたらいいのか等の問題解決方略を知って、子どもに教えられることが重要である。

イ. 二次的不登校

身体的な病気、もしくは親子関係の問題がきっかけで、結果的に不登校になった場合を言います。不登校自体が主な問題ではないため、二次的不登校と呼ばれます。例えば、けがでしばらく入院していた子どもが、学校に復帰したものの、一時的な空白によって、学習の遅れや友人との違和感を強く覚え、不登校になった場合がこれに当たります。

二次的不登校の中で、ここでは近年新しいタイプの不登校と言われる「発達障害が背景にある不登校」、及び典型的な不登校と区別しにくい「精神疾患が背景にある不登校」について取り上げます。

<発達障害が背景にある不登校>

発達障害の子どもが学級集団において不適應をおこし、不登校になった場合。不登校になった最初は、家庭においてひどいパニックを繰り返すほど、不安定になることがある。また、不登校の要因は発達障害の種々の特徴から生じるため、一旦学校を休み始めると、復帰は簡単ではなく、本人の特徴をふまえた学級運営（雰囲気、ルール等）が絶対的に必要となる。

<精神疾患が背景にある不登校>

精神症状のため、外出することや人に会うことができず、学校を欠席するように至った場合。本来、精神疾患による欠席は病欠となるが、無気力や精神活動のみが極端に低下した場合、典型的な不登校との見分けがつきにくいこともある。また、うつ的な気分が慢性的に持続し、意欲のなさから学業不振になって、登校しにくさが増幅されることもある。精神疾患が背景にある場合、問題は日常生活全般にわたって出現することが多いので、不登校のみに着目せず、子ども全般の様子を把握した方が良いと思われる。



2 | 総合教育センターの取組み

各学校の教員をはじめ、教育行政関係者や県民の方々に、総合教育センターが、平成21年度より不登校に関する調査研究に取り組んできた概要を紹介いたします。

ア. 3年間の取組み

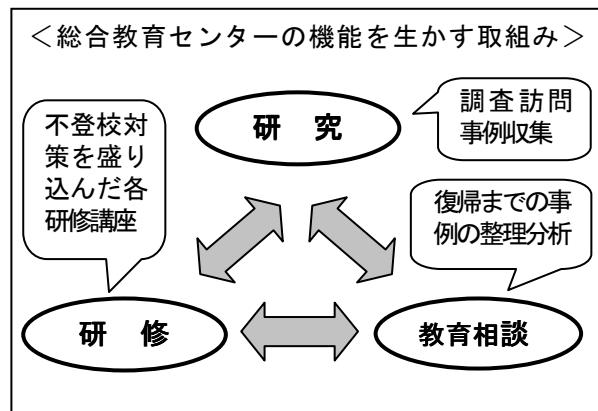
(ア)平成21年度の取組み

1年目の平成21年度は、県内外の不登校対策に関する調査、授業改善を中心とした不登校未然防止の情報収集、県立高等学校定時制課程在籍生徒に対する調査などに取り組みました。

(イ)平成22年度の取組み

所内に「不登校対策プロジェクトチーム」を立ち上げ、総合教育センターがもつ研究・研修・教育相談という三つの機能を生かして不登校対策について考察しました。

そして、総合教育センターは、次の3点を目指すものとなりました。



- 不登校の未然防止に向けた、「魅力ある授業づくり」と「居心地のよい学級づくり」に向けた「授業改善」
- 全ての教員が不登校対策に関する研修を受講する体制を実現し、「教員の力量アップ」
- 不登校の児童・生徒やその保護者に対する「相談機能の向上」

総合教育センターは、「学校ができる、教員ができる不登校の未然防止」に主眼を置き、魅力ある授業づくりと居心地のよい学級づくりをポイントと捉え、研究を進めてきました。(調査訪問校計 13 校：小 4 校・中 5 校・高 4 校)

(ウ)平成23年度の取組み

平成21・22年度の調査研究を踏まえて、総合教育センターの各研修講座の中で「不登校対策」の内容を盛り込んだ講義・演習に、研究成果を反映させてきました。また、総合教育センターをはじめ、各研究発表大会で成果を発信してきました。(調査訪問校計 6 校：小 1 校・中 3 校・高 2 校)



イ. 各グループの取組み

(ア)調査研究グループ

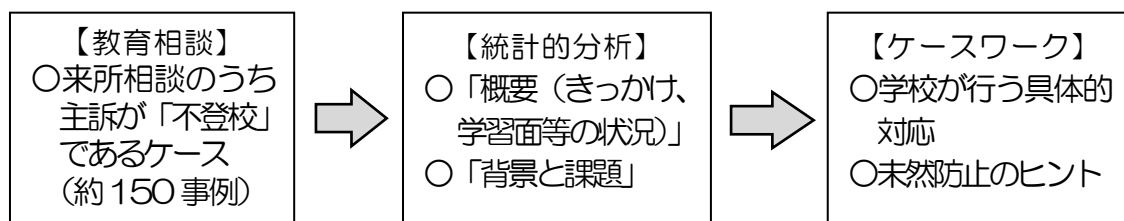
調査研究グループは、不登校対策につながる「魅力ある授業づくり」と「居心地のよい学級づくり」を中心とした取組みに注目し、事例収集を行ってきました。また、不登校相談会や「登校支援トータルサポート事業」など、教育委員会による児童・生徒指導関係の会議にも加わり、幅広い情報交換に努めました。

(イ)研修グループ

研修グループは、教職経験に応じて必須となる「基本研修」及び新任管理職を対象とした「学校経営研修」の中で、不登校の未然防止に向けての研修を実際に行いました。研修後にはアンケート調査を実施し、受講者及び研修実施者の評価・感想等を把握・分析しました。分析結果や調査研究グループの研究、前年度までの「神奈川県 児童・生徒の問題行動等調査結果」等をもとに次年度の研修のねらいや内容を策定しました。(98ページ参照)

(ウ)教育相談グループ

総合教育センター亀井野庁舎は、教育相談センターとして多様な専門職を配置した教育相談事業を行っています。教育相談グループでは、来所相談のケースの内容から、学校が不登校対策に取り組む上で参考になる内容の抽出を行いました。そして、学校が行う不登校の未然防止につながる具体的な対応等をまとめました。



総合教育センターでは、このガイドブックのほかに『神奈川県立総合教育センター 研究集録第31集』も刊行しています。その中に、「不登校に係る調査研究(まとめ)」の論文が掲載されていますので、併せてご覧下さい。

「不登校の未然防止」に向けて行った講座 (平成 23 年度・研修講座)

基本研修	人格的資質向上区分	授業力向上区分	課題解決力向上区分
初任	<p>【神奈川の教育課題】 ～不登校問題を中心に～ ・児童・生徒への対応 (時間) 90 分間 (小・中) 30 分間 (高・特) (講師)・大草心理臨床・教育相談室 大草正信 (小・中) ・県教育委員会 子ども教育支援課 (高・特)</p>	<p>【不登校の未然防止に つなげる教科指導】 ・授業と不登校との関係 ・児童・生徒の興味・関心を 惹く授業 (時間) 60 分間 (講師) 所員</p>	
2年	<p>【神奈川の教育課題】 ～不登校問題を中心に～ ・児童・生徒への対応 (時間) 90 分間 (講師)・大草心理臨床・教育相談室 大草正信 ・東海大学教授 芳川玲子</p>	<p>【不登校の未然防止に つなげる教科指導】 ・授業と不登校との関係 ・児童・生徒の興味・関心を 惹く授業 (時間) 60 分間 (講師) 所員</p>	<p>【居心地のよい 学級づくり】 ・居心地のよい学級の条件 ・不登校児童・生徒を減らし た学校が行った手立て (時間) 30 分間 (講師) 所員</p>
5年	<p>【神奈川の教育課題】 ～不登校問題を中心に～ ・不登校の主な原因 (時間) 30 分間 (講師)・県教育委員会 子ども教育支援課</p>	<p>【不登校の未然防止に つなげる教科指導】 ・授業と不登校との関係 ・児童・生徒の興味・関心を 惹く授業 (時間) 60 分間 (講師) 所員</p>	<p>【居心地のよい 学級づくり】 ・居心地のよい学級の条件 ・不登校児童・生徒を減らし た学校が行った手立て (時間) 30 分間 (講師) 所員</p>
10年	<p>【神奈川の教育課題】 ～不登校問題を中心に～ ・不登校の主な原因 (時間) 30 分間 (講師)・県教育委員会 子ども教育支援課</p>	<p>【不登校の未然防止に つなげる教科指導】 ・授業と不登校との関係 ・児童・生徒の興味・関心を 惹く授業 (時間) 60 分間 (講師) 所員</p>	
15 ・ 25年	<p>【神奈川の教育課題】 ～不登校問題を中心に～ ・不登校の主な原因 (時間) 30 分間 (講師)・県教育委員会 子ども教育支援課</p>	<p>※「初任」「2年」「5年」等は神奈川県で行って いる基本研修の年次を示します。</p>	
新任管理 職研修	<p>学校長 (全校種)</p> <p>新任校長研修講座 「不登校対応のための教育相談コー ディネーターをいかにした校内支援体 制づくり」 (時間) 100～180 分間 (講師)・慶應義塾大学教授 伊藤美奈子 ・東海大学教授 芳川玲子 ・厚木市立小学校長 藍原万里子 ・厚木市立小学校長 新井啓司 ・厚木市立中学校長 山田一夫 ・県立高等学校長 萩元幸治</p>	<p>副校長 (県立学校)</p> <p>新任副校長研修講座 「不登校への理解と対応」 ・不登校の組織的な未然防止 ・校内支援体制づくり (時間) 90 分間 (講師) 早稲田大学教授 菅野純</p>	<p>教頭 (全校種)</p> <p>新任教頭研修講座 「不登校への理解と対応」 ・不登校の組織的な未然防止 ・校内支援体制づくり (時間) 90 分間 (講師)・さいたま市教育 相談センター所長 金子保 ・東京学芸大学 教職大学院教授 小林正幸</p>

不登校対策に関する神奈川県教育委員会刊行物等一覧

- 不登校対策指導資料「登校支援のポイントと有効な手立て」
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/34781.pdf>
- 神奈川県不登校対策検討委員会 報告書【最終版】
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/366050.pdf>
- 神奈川県不登校対策検討委員会 報告書
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/34782.pdf>
- 平成 22 年度 神奈川県児童・生徒の問題行動等調査 調査結果一覧
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/366026.pdf>
- 相談機関 神奈川県立総合教育センター(教育相談センター)
<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/Snavi/soudanSnavi/>
- 不登校対策事業
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6692/p20499.html>
 - 県立高校不登校生徒等単位認定プログラムについて
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f7157/>
 - 学校とフリースクール等との連携について
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6707/>
 - 不登校児童・生徒の学校生活再開や将来の社会的自立に向けて
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/168270.pdf>
 - 教育委員会とフリースクール等による不登校相談会
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/168271.pdf>
 - 不登校生徒・高校中退者のための進路情報説明会・不登校相談会
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f7482/>
 - フリースクール見学会について
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f7441/>
- いじめ対策事業（「仲間づくり教室」「絆づくり研修講座」の実施）
よりよい人間関係作りのための心理教育的プログラム
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/35021.pdf>
- きんたろうキャンプ
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f300169/>

引用文献・参考文献

[引用文献]

- 国立教育政策研究所生徒指導研修センター 2011 「平成23年度『魅力ある学校づくり調査研究事業』実施要項」 p. 1 http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/23seitojigyo/youkou_02.pdf (URLは2012年4月に取得)
- 文部科学省a 2010 『生徒指導提要』 p. 188
- 文部科学省b 2010 『生徒指導提要』 p. 15
- 神奈川県教育委員会 2008 「登校支援のポイントと有効な手立て」 <http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/34781.pdf> (URLは2012年4月に取得)
- 神奈川県教育委員会 2009 「支援シートで支援をつなごう！～充実した学校生活のために～」
- 神奈川県教育委員会 2010 「平成22年度神奈川県児童・生徒の問題行動等調査 調査結果概要 確定値」 p. 4 <http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/397090.pdf> (URLは2012年4月に取得)
- 神奈川県教育委員会 2010 「平成21年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査結果のまとめ」 p. 70
- 神奈川県教育委員会 2011 「平成22年度神奈川県児童・生徒の問題行動等調査 調査結果一覧 速報値」 p. 18、p. 19、p. 20、p. 25、p. 29 <http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/366026.pdf> (URLは2012年4月に取得)
- 神奈川県立総合教育センター 2010 「明日から使える支援のヒント～教育のユニバーサルデザインをめざして～」 p. 1 http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/download/h21pdf/siteikou_kou.pdf (URLは2012年4月に取得)
- 神奈川県教育委員会 2011 「平成22年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査結果のまとめ」 pp. 57-58
- 神奈川県教育委員会 2011 「平成23年度神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」 p. 52
- 神奈川県教育委員会 2011 「不登校対策検討委員会報告書【最終版】」 p. 2、p. 3 <http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/366050.pdf> (URLは2012年4月に取得)
- 南足柄市教育委員会 2011 「小中連携支援シート」
- 小林正幸 2009 『学校でしかできない不登校支援と未然防止』 東洋館出版 pp. 14-15
- 二宮孝・中山正秀・諸澄敏之 1998 『今こそ学校にアドベンチャー教育を「心の教育」実践プログラム』 学事出版 p. 140

[参考文献]

- 国立教育政策研究所生徒指導研修センター 2011 「『平成23年度魅力ある学校づくり調査研究事業』ブロック協議会資料」
- 日本心理学会 2010 「学校でしかできない不登校対策『小中連携支援シート』サポートシステムの成果と課題 南足柄市「支援シートを活用した小・中連携」について
- プロジェクトアドベンチャージャパン 2005 『クラスの間関係がぐ～んとよくなる楽しい活動集』学事出版
- 齊藤孝 2004 『偏愛マップ』 NTT出版
- 諸澄敏之 2001 『手軽で楽しい体験教育 よく効くふれあいゲーム119』 杏林書院
- 諸澄敏之 2005 『みんなのPA系ゲーム243』 杏林書院

『学校ができる 教員ができる 不登校の未然防止』の作成関係者

<助言者>

所 属	職 名	氏 名
文部科学省	視学官	三好 仁司
横浜国立大学	教授	高木 展郎
東海大学	教授	芳川 玲子

<神奈川県立総合教育センター不登校対策プロジェクトチーム>
(事務局)

所 属	職 名	氏 名
企画広報課	課長	森 加津子
教育課題研究課	課長	戸田 崇
教育課題研究課	主幹(兼)指導主事	鈴木 直人

(調査研究グループ)

所 属	職 名	氏 名
教育課題研究課	指導主事	牛島 操
教育課題研究課	指導主事	渡辺 良勝
教育課題研究課	教育指導専門員	杉山 薫
教育課題研究課	教育指導専門員	田中 伸一
教育課題研究課	教育指導専門員	結城 卓彦

(研修グループ)

所 属	職 名	氏 名
教職キャリア課	指導主事	浅川 俊樹
教職キャリア課	指導主事	黒田 環
教職キャリア課	指導主事	松澤 直子
教育人材育成課	指導主事	小林美奈子

(教育相談グループ)

所 属	職 名	氏 名
企画広報課	副主幹(兼)指導主事	田中 宏史
教育相談課	指導主事	亀井 敏明
特別支援教育推進課	指導主事	澤田 丈嗣

『学校ができる 教員ができる 不登校の未然防止』の作成にあたって
聞き取りを行った学校・行政機関

<小学校> 5校

厚木市立小学校	4校
南足柄市立小学校	1校

<中学校> 8校

厚木市立中学校	2校
南足柄市立中学校	1校
小田原市立中学校	1校
横須賀市立中学校	2校
相模原市立中学校	2校

<高等学校> 6校

神奈川県立高等学校（全日制課程）	3校
神奈川県立高等学校（定時制課程）	3校

<行政機関> 2機関

厚木市青少年教育相談センター
南足柄市教育委員会

学校ができる 教員ができる 不登校の未然防止

発行 平成24年4月

発行所 神奈川県立総合教育センター

〒251-0871 藤沢市善行7-1-1

電話 (0466)81-1659 (教育課題研究課 直通)

ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>

※本冊子については、ホームページで閲覧できます。

再生紙を使用しています



神奈川県立総合教育センター

善行庁舎
〒251-0871 藤沢市善行 7-1-1
TEL (0466) 81-0188
FAX (0466) 84-2040

ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>

亀井野庁舎（教育相談センター）
〒252-0813 藤沢市亀井野 2547-4
TEL (0466) 81-8521
FAX (0466) 83-4500

